

具体的に想像し論理的に表現する説明的文章の指導

大阪市立太子橋小学校 校長 栗山 功

1 はじめに

文学的文章において「空所」を読むことが重要なように、説明的文章においても、どれだけ具体的に捉え、想像を膨らませるかが重要であると考えます。そこで、重要な語句を言い換えたり事象を具体的に想像したりすることで、内容をより深く理解させ、理解したものを活用して論理的に表現する授業を構想し、実践したいと考えました。

2 指導の重点

指導の重点は、以下の通りである。

重点1 書かれている内容を言い換えたり具体的に想像したりする

- ・文章で使われている言葉を別の言葉で言い換えることで内容の理解を促す。
- ・仮定したり動作化したりすることで子どもの守り方を具体的に想像させる。

重点2 学習したことを活用して論理的に表現できる言語活動に取り組む

- ・第二次で学習したことが活かされる第三次の言語活動を設定する。
- ・学習者の考えが表現できる場を作る。

3 実践事例

(1) 単元名 「どうぶつの ひみつ イチオシ はっぴょうかい」をしよう

(成島悦雄「子どもを まもる どうぶつたち」東京書籍1年下)

(2) 単元目標

① 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。

[知識及び技能] (2)ア

② 動物の「体の特徴や生態」「子育てにおける困難」「子どもを守る知恵」「知恵を使うわけ」を表す語や文を見付けることができる。[思考力、判断力、表現力等] C(1)ウ

③ 動物の生態について書かれた文章や資料などを読んで、感じたことや分かったことを伝え合うことができる。[思考力、判断力、表現力等] C(1)カ

④ 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。[学びに向かう力、人間性等]

(3) 本単元における言語活動

動物の子どもの守り方の秘密を伝え合う『「どうぶつの ひみつ イチオシ はっぴょうかい」をしよう』という言語活動を設定する。

(4) 学習指導計画 (全 11 時間)

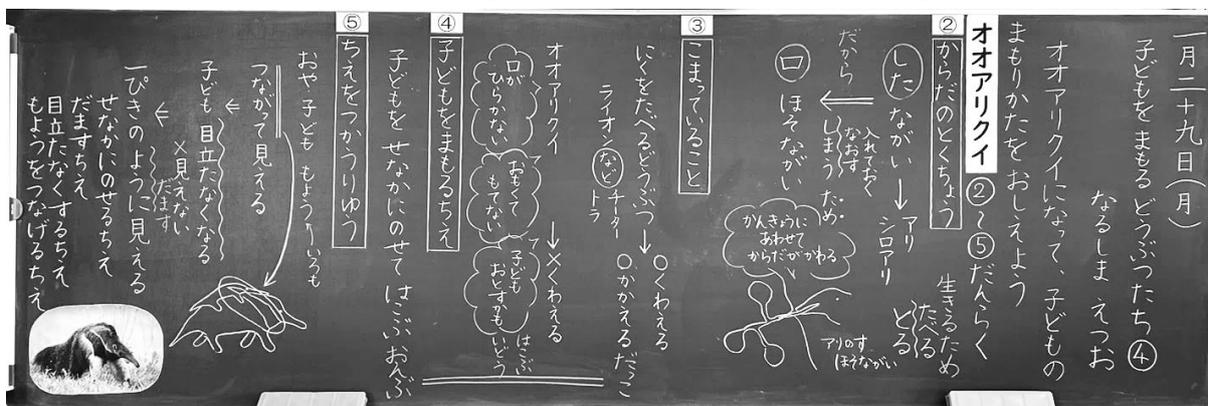
次	時	学習活動	指導上の留意点
一	1	○学習材を読み、初発の感想を書く。	・「どうやって みを まもるのかな」の学習を振り返ることで、動物の身の守り方について想起させるとともに、教科書の扉写真(ライオン)を提示することで、本単元では子どもの守り方についての学習であることを伝え、動物の子どもの守り方について興味・関心をもたせるようにする。
	2	○初発の感想を交流し、単元の見通しをもつ。	・初発の感想(驚いたこと、疑問に思ったこと、もっと知りたいことなど)を交流し、動物の子どもの守り方

			について調べ、カードにまとめて紹介するという単元の見直しをもてるようにする。
二	3	○大まかな文章構成を捉え、内容の大体をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> • 二つの動物の子どもの守り方の説明が書かれているところを見付けさせることで、文章全体を「はじめ(問い)」「なか(動物の子どもの守り方の説明)」「おわり(まとめ)」に分けられるようにする。 • 「体の特徴(や生態)」「子育てにおける困難」「子どもを守る知恵」「知恵を使うわけ」の観点で説明されていることや、そこで使われている言葉(「ために」「ので」「そこで」)を捉えられるようにする。 • オオアリクイの説明の観点を振り返り、同じ観点をコチドリも書かれていることを押さえるとともに、コチドリの子どもの守り方を動作化することで、順序と内容を確認められるようにする。 • オオアリクイとコチドリの守り方の相違点と共通点を見付けられるようにする。
	4	○オオアリクイの子どもの守り方を探る。	
	5	○コチドリの子どもの守り方を探る。	
	6	○オオアリクイとコチドリの子どもの守り方を比べる。	
三	7	○興味のある動物について図鑑や資料などを用いて調べる。	<ul style="list-style-type: none"> • 四観点で子どもの守り方が説明されていたことを振り返り、それらに着目して調べるように声をかける。 • 説明するときを使う言葉や文型を確認し、どのような表現を使えばよいのかを考えられるようにする。 • 子どもを守り方を考えながら聞くように促し、すごいところやもっと知りたいことを伝えるようにする。 • 子どもを守り方に着目させて「○○のちえ」と名付けてまとまりを作るようにし、「子そんをのこし、いのちをつなぐ」とは、どういうことなのかを考えさせるようにする。 • 学習者の変容や努力を伝えたり学びや気づきなどを書かせたりすることで学びを自覚できるようにする。
	8	○紹介したい動物を選び必要な事項をカードに抜き出す。	
	9	○「どうぶつのひみつカード」の内容を伝え合い感想を交流する。	
	10	○伝え合った動物の子どもの守り方を「○○のちえ」と名付けるとともに、命のつながりについて考える。	
	11	○単元を振り返る。	

(5) 授業の実際と考察

重点1 書かれている内容を言い換えたり具体的に想像したりする

第4時を取り上げて、考察する。以下は、第4時の板書である。



小学1年生である学習者は、まだまだ語彙も少なく、学習者によってその差も大きい。そのため、できるだけ学習者の理解が同じように促されるよう文章中に使われている言葉を生活経験や読書経験から得られた言葉に置き換えさせたり似ている言葉に言い換えさせたりする機会を多くもつよう心がけて授業を行った。

例えば、「とる」とはどういうことなのか、なぜそうする必要があるのであるのかを考えさせた。学習者は「とる」とは「食べる」ことであり、それは「生きるため」に必要なことであると答えた。アリやシロアリが住んでいる場所を考えると、舌が長い方がそれらを捕食しやすいということを理解することで、舌をしまう口も細長くなることに納得している様子であった。学習者は、獲物に応じて体のつくりがうまくできていることにオオアリの体の特徴のすごさであると捉えていった。

また、オオアリの困る姿を具体的に想像することで、対比的に描かれている動物との違いを理解させるようにした。授業者が「もしも、オオアリのライオンと同じように口でくわえて子どもを運ぼうとしたら、どうなる？」と尋ねた。すると、「(子どもをくわえられるほど) 口が開かへんで」「重くて子どもを持ってないよ」「口が折れちゃうかも」「くわえられたとしても、子どもを落とすっちゃうかもしれへん」とくわえて運ぶことができない理由をオオアリの細長い口を想像しながら考えようとする発言が見られた。オオアリの困る姿を具体的に想像することで、他の方法で子どもを守るために知恵を働かせる必要があることを理解することができた。さらに、抱えるとはどうすることか、背中に乗せるとはどうすることかを動作化させることで、抱えるとは「抱っこ」であり、背中に乗せるとは「おんぶ」であると自分たちの生活経験を思い起こし、運び方は異なっても移動させることは同じであり、ライオンもオオアリの移動させて子どもを守っていることを捉えていった。

このように、書かれている内容を学習者の知っている言葉に言い換えたり仮定して想像したりすることで、書かれていることをより深く理解したり、明記されていないことへの理解を促したりすることにつながった。

重点2 学習したことを活用して論理的に表現できる言語活動に取り組む

第三次では、イチオシの動物の子どもの守り方を紹介する言語活動を設定した。その際、紹介する内容をカードにまとめるようにした。カードの内容は、主に次の五点である。

- ・動物の名前
- ・子どもの守り方を「○○の知恵」と名付けたもの
- ・親の立場になって、子どもの守り方を説明したもの
- ・子どもを育てている様子のイラスト
- ・動物博士になって、イチオシの理由を伝えたもの

「知恵」と「守り方の説明」は、第二次第4時のオオアリの第5時のコチドリで学習した経験を活かすようにした。紙幅の関係上、第4時のみ紹介する。

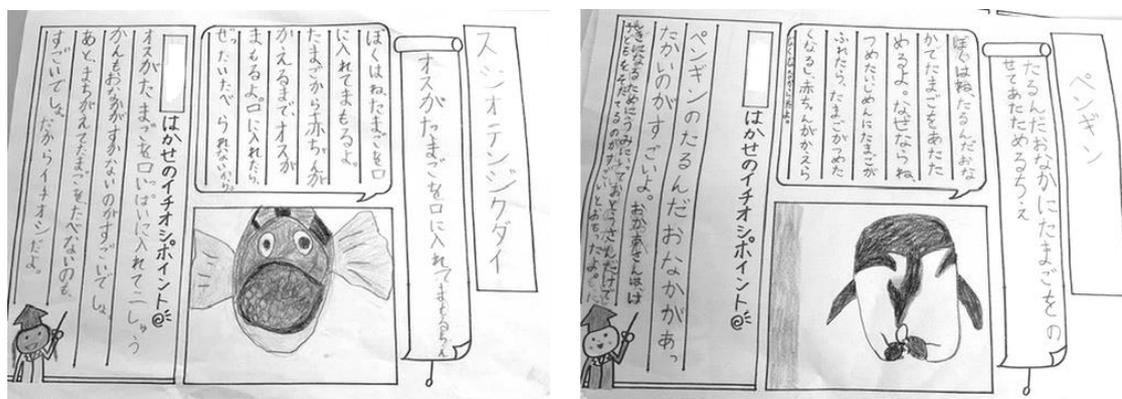
第4時の学習の最後に、どんな知恵を働かせていたのか「○○のちえ」(板書左側)という形で学習者に考えさせた。また、オオアリの親の立場になって守り方を説明させるこ

とで学習のまとめとした。以下の内容は、学習者がノートに書いた守り方の説明である。

・わたしは、子どもをせなかにのせてはこぶどうぶつなの。なぜなら、わたしは口がほそながいから子どもをくわえてはこぶことができないの。だからね、わたしは、子どもをせなかにのせてはこぶの。それにね、せなかにのせたら、わたしの子どもとわたしのもようがつながって見えるから、あんまり子どもが目立たなくなるからなの。

・子どもをせなかにのせて、おんぶみたいにはこんで子どもをまもるちえをつかっているんだよ。なぜ、口ではこばないかって。だって、口がひらかないし、子どもをおとすかもしれないからだよ。なんでせなかにのせるのかって。それは、もようがつながって見えるから子どもが自立たなくなつて、子どもをまもることができるんだよ。

第三次では、これらの学習を活かしてイチオシの動物の守り方を紹介するようにした。以下は、学習者が作成したカードである。



カードに書く際には、「知恵」「守り方の説明」「イチオシポイント」のつながりを意識させながら書かせるようにした。また、書いた後には、自分がイチオシだと思った理由が書かれているか、そのイチオシの守り方が説明できているか、守り方がわかる名付けになっているかと、逆から読むことで内容のつながりが保てているかを考えさせるようにした。

このように、二種の子どもの守り方について読み取る学習をした後に、他の動物についても同じ観点で調べ、気づきやすごいと思ったことをイチオシとして伝え合うようにすることで、第二次で学習したことを活かして論理的に表現することを楽しむことができた。

4 おわりに

本実践では、動物の親の立場になって考えさせることで、具体的に子どもの守り方を想像することができ、小学1年生なりに守り方を説明することができた。また、動物博士となって、その動物の守り方のイチオシポイントを考えさせることで、守り方の説明では書き切れなかった動物の守り方のよさや自分がその動物に心を惹かれた理由を書くことができ、単なる内容の読み取りではなく、動物との関わりをもちながら学習を進めることができた。また、「知恵」と「守り方の説明」と「イチオシポイント」の三つのつながりを意識させることで、論理的に表現しようとする学習者の姿が見られた。しかし、なかには、「知恵の説明」と「イチオシポイント」のつながりが薄いものを書いた学習者も見られた。そのため、今後は、学習者自身で論理のずれに気づくための手立てを考えたい。

執筆原稿提供者 大阪市立太子橋小学校 日野 朋子